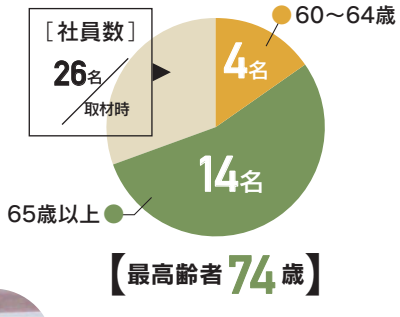
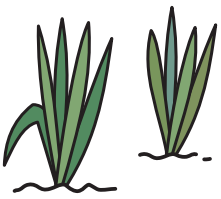
Case 1

農業生産法人 卑弥呼の杜株式会社

所在地	糸島市曽根164-3
業種・事業内容	**農業（青ネギの生産・販売）**
設立年	平成22年
シニア人材の雇用制度	**定年65歳、70歳まで継続雇用**



【最高齢者 74歳】



Point

- 積極的に地域のシニアを新規雇用
- 適正配置への細やかな配慮
- 病気の治療と仕事の両立と地域貢献への思い

農業生産法人 卑弥呼の杜株式会社の代表取締役社長
中村美根子氏と統括 中村昭則氏にお話を伺いました。

企業の沿革、特徴、理念

御社の沿革などお聞かせください。

農業には、（昭則氏が）酒造メーカーを定年退職した後の平成22年から取り組んでいます。実は農業をすることは当初の人生計画にはなく、会社員時代の激務の日々を取り返そうと、のんびり過ごすことばかり考えていました。そのようなとき、ネギ農家の親族から、60歳は完全リタイアには早すぎると言われ、その親族から教えてもらいながら、ネギの生産を始めることになりました。夫婦で株式会社を設立して、現在は、業務用と市販用の青ネギの生産販売をしています。

「卑弥呼の杜」の社名は、一説では卑弥呼の墓とも言われる近隣の平原遺跡と、代表取締役の定番ジョーク「私は卑弥呼の生まれ変わり」に由来しています。市販用ネギの包装ビニールには卑弥呼をモチーフにしたイラストをプリントしています。

「心豊かな農業経営」を社是として、地域社会に貢献できる農業に取り組んできました。設立当初から、地域に助けてもらいながらの農業経営でしたので、お返しをしたい気持ちがあります。従業員も近隣の人、特にシニアを多く採用して、活躍してもらっています。

青ネギについて教えてください。

鴨頭（こうとう）という品種のネギを生産販売しています。徐々に契約先も増え、業務用ネギの契約先には関東の会社もあります。カットネギは、業務用、市販用ともに人気があります。

しかしながら、今年は梅雨期の少雨や猛暑、台風の被害で農家にとってたいへん厳しい一年となりました。我が社のネギも暑さの影響などで育たず、新たに植え付けをしなければならない状況となりました。温暖化は、すべての農業人にとって大きな課題です。青ネギの生産でも、新しい品種の導入や、別の品種と鴨頭ネギの混植など様々な試みが必要になっています。

シニア人材の雇用（新規雇用）

シニア人材の雇用について、お聞かせ願います。

我が社の従業員はほとんどがシニアです。季節や注文数によって、業務量が変動しますので、パートタイムで勤務してもらっています。

今年度、生涯現役チャレンジセンターの「シニア人材活用アドバイザー」からのサポートを受けて、新たに就業規則を定めました。定年65歳、継続雇用70歳までとしましたが、実際には、70歳を過ぎたパートタイム従業員が多数働いています。現在の最高齢従業員は74歳ですが、つい最近まで80歳代の方もいました。

このように、我が社ではシニアが貴重な戦力となっていますので、シニアの新規雇用にも積極的です。求人にあたっては、「ネギ畑の草刈り」など具体的な業務内容で求人を出しています。採用面接時に実際の作業内容を見学してもらい、試しにやってもらうことで、自分にできる業務内容か本人が判断できる機会も設けて、ミスマッチを防止するようにしています。そして、採用後１か月間を試用期間として、働きぶりを見極めて本採用するか判断しています。

業務体制

シニアの業務内容について、詳しくお聞かせいただけますか。

全ての工程でシニア従業員が働いています。工程は大きく分けて、圃場、選別、キザミの３つです。圃場はネギ畑のことで、ここでは、苗植え、収穫、除草などの作業をしてもらいます。選別では、収穫したネギのサイズ分け、皮むき、箱詰めなどの作業を行います。キザミではカットネギに加工する作業を行います。

できるだけ本人の能力に見合った工程についてもらうよう適正配置を心がけています。選別の工程では機械を導入していて、流れ作業の部分がありますので、年齢を重ねたことによる視力の問題で、周囲の人達のスピードについていけなくなることがあります。そういった場合は、全体の作業効率が下がりますし、本人もつらいと思いますので、除草など他の作業への配置換えを提案することもあります。本人が納得した上での配置変えにした

いので、本人との協議はきちんとするようにしています。

除草の求人に応募してくれた74歳の人を、選別の担当として採用したことがあります。暑い中での草刈り作業は、経験のないシニアには厳しいと思われたため、いったん採用を見送りましたが、面接の際、以前は機械整備をしていたと話していましたので、機械を扱う選別の工程が向いているのではと思い、あらためてこちらから連絡しました。試しに作業をしてもらったところ、適性がありましたので、本採用としました。

業務はどのように覚えてもらうのですか。

工程によって業務内容が異なりますので、OJTで覚えてもらいます。先輩従業員の中からコーチ役を選び、わからないことはその人に聞いてもらうようにしています。コーチ役となった人には、仕事内容を教えるだけでなく、同僚や環境に馴染んでもらう手助けもしてもらいます。従業員同士の仲は良く、コミュニケーションも良好だと思います。

シニア従業員の多い職場で、労務管理上などで特に注意していることはありますか。

年を取ると病気など健康問題が多くなりますので、無理をしていないか、日頃から注意を払っています。日頃のやり取りを通して変化を見逃さないようにして、体調が悪い人には医療機関を早めに受診するよう勧めています。開業から10年と少しになりますが、悲しい別れも経験してきましたので、早期発見・早期治療の大切さは身に染みています。

小規模の会社ではありますが、病気の治療と仕事の両立ができるよう、できる限りのことをしています。治療の甲斐なく病気が進行してしまった人にも、本人が仕事を続けることを望んでいて、一人で過ごす方が精神的によくないと思われる場合などは、退職は勧めず、その時々の体力でできる軽易な仕事を調整してやってもらうこともあります。できるだけ長く、その人らしい日々を過ごす手助けをしたいので、寄り添い見守るような関わりを心がけています。亡くなった後、遺族の方から、おかげで穏やかな時間を過ごすことができたと言われたときは、少しは恩返しができたのかなと感じました。地域の人達に助けてもらいながらの農業経営でしたので、こういったことでも、地域への恩返しができればと思います。

ネギ皮むき洗浄機

今後の展望

最後に生涯現役社会、人生100年時代について、ご意見をお聞かせください。

生涯現役社会、人生100年時代を意識してきたわけではありませんが、個人的には、体が動く限り仕事は続けたいと思っています。会社の経営は、近い将来息子が引き継ぐことになりましたので、今後も地域で雇用の場を提供できる目途はつきましたが、引き継いだ後も、仕事は頑張っていきたいです。ネギ農家を始める前、のんびりすることばかり考えていた頃とは正反対の心持ちです。

この地で農業を始めて、事業主として人を雇用する立場になって得た実感ですが、金銭的な余裕は心の余裕に繋がり、自ら働いて得た報酬は身に付いたお金になります。これから、ますます超高齢社会となりますので、誰しも元気なうちは、働くことで、経済的なゆとりと人生の張り合いを持った方がよいと思います。

「商の情（あきないのこころ）」という佐治敬三氏の言葉があります。商人のあるべき姿として、儲けばかりを追求するのではなく、人や地域社会への配慮が大切であることを表した言葉です。ずっと心に留まっている言葉で、会社として何かを始めるときに思い起こされます。これからも、地域貢献の精神を忘れず、公の器として社会責任を果たす会社でありたいと思います。

STAFF Interview

もりしげ たえこ
森重 妙子さん
67歳/取材当時

勤務歴は６年です。ネギをカットするキザミ工程の責任者をしています。始業時間は8時30分で終業時間は注文量によって前後するので定まっていません。ここに就職する前は、事務職をはじめとして、いろいろな仕事を経験してきました。自宅から近いところが気に入って求人に応募しましたが、社内の雰囲気が良く、働きやすい職場なので、長く働き続けたいと思っています。

ともなり つぎよ
友成 次代さん
70歳/取材当時

ここで働き始めて８年になります。選別工程で主に箱詰めを担当しています。始業は９時で、終業時間は注文量により変わりますので、午前で終わるときもあれば、午後まで作業することもあります。一斉休業日はお正月前後だけで少ないのですが、休暇はローテーション制で取得しやすいです。自分にとっては、仕事が生活の励みになっているので、これからも働き続けたいです。

ひらた あけみ
平田 あけみさん
63歳/取材当時

就職して３年ほどになります、圃場で、苗植え、収穫などを担当しています。力仕事が多い上、真夏や雨の降る日にも作業は待ってくれませんが、体力に見合った仕事を調整してもらえます。社長、統括とも隔てなくお話しできますし、周囲の人達とのコミュニケーションが取りやすく、働きやすい職場です。家にいるより仕事に来る方が楽しいので続けていきたいです。

取材を終えて

代表取締役、統括をはじめとして、お会いした皆さんが、文字どおり「活躍するシニア」でいらっしゃいました。従業員の方たちが、仕事が楽しい、職場の雰囲気が良いと口々に言われていたことも印象的でした。

気候に左右される農業経営の厳しさ、経営の持続に向けた努力、働きやすい職場づくりに取り組む姿勢などをお聞きして、頭が下がる思いでした。